令和6年度　自己評価表（最終評価）

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	１　主体的学習者の育成 ２　21世紀をリードする人材の育成

今年度の重点目標	１　学校の魅力化・特色化の推進・発信と中高連携の強化 ２　定時制教育のさらなる充実 ３　生徒支援の充実と業務改善の取組

〇評価基準　A　80%以上（概ね達成）　B　60～80%（一定の成果がある）　C　40～60%（さらなる努力が必要）　D　40%以下（現状が改善されていない）

【全日制課程】

年度当初					評価結果（3）月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
学校の魅力化・特色化の推進	国際バカロレア（IB）教育の実施 （グローバル人材育成重点校） GP2・CP1	・生徒と教員が共に初めて取り組むプログラムであるため不安もある中で、IB生の一期生のDP授業が始まった。生徒たちは前向きに学びに取り組んでいる。 ・二期生については、選考時期を早める改善を行いつつあり、適切な進路選択とプレIBを通じたIBの学び方の定着が一層求められている。 ・一期生のために数年前にワークショップに参加し，先進校視察や研修を通じて準備してきた教員が一期生の指導にあたっているが、2025年度からはその教員以外の教員もIBの授業を担当することになるため、2024年度からの準備が必要である。	・生徒アンケートを実施し，80%以上の生徒がATL各スキルについて意識して習得し活用しようとしている。 ・生徒アンケートを実施し，80%以上の生徒がコア科目の学習意義を理解し前向きに取り組んでいる。 ・探究型学習の展開における図書館の有効活用を検証し、来館者数と貸出冊数の2つの積が1000を超える日が開館日の半分以上となっている。 ・2025年度に向けた指導体制を構築できている。	・生徒が各スキルをバランスよく身につけるためにも，教科担当者によるM&Iの中で協議し教科横断的に進める。様々な問題が生じた際に生徒が取得したスキルを活用して自身で問題を解決できるよう、伴走者としての教師の役割を確認する。 ・CAS（創造性・活動・奉仕）・EE（課題論文）の各コーディネーターは，指導担当教員やアドバイザーと協働し推進する。TOK教師は，様々な科目の教師と一緒に授業が行えるように時間割を工夫する。 ・策定した図書館の方針について，ウェブサイトに加えて新入生のしおりや学校要覧等で概要を公表し，図書館活用の周知を進める。 ・ワークショップ参加や研修会参加を通じて，教員のDPの学びへの理解を深める授業準備を促進し、DPが指導できる教員を増やす。	・授業評価アンケートによると生徒はATLスキルを習得し，活用しようとしているが，自己管理の発揮等の特定のスキルの活用に難しさを感じている。また，コア科目と各教科のつながりをもって教科横断的な学びに取り組んでいる。 ・EEは定期的な指導教員の打ち合わせを実施，CASは不定期に実施した。EEは11月にIB校から講師を招いての教職員研修会を実施し，CASはIBO公式校内ワークショップを8月に実施し，教職員の理解促進に努めた。 ・プレIBを始めているが，プレIB担当教員には授業の加配がなく，DPの授業準備まで取り組める余裕がない。 ・IB生を含めた学校全体の進路指導の立ち位置や方針を定める。 ・図書館の指標については，12月末時点で開館日154日に対して目標を上回った日は約16%であった。	B	・授業評価アンケートの集約後に，教科担当者の会で振り返りを行ったが、有効な協働設計を進めることが十分とは言えなかった。次年度は協働設計のテーマを設定することと生徒の情報交換を主として，運営上の連絡や協議は別の場を設定する。 ・各教科の教師や課題論文の指導教員は，DP2について内部評価をし予測スコアを算出する必要があり，それに向けた準備を行う。 ・IB教師が1年1，2組の授業を担当することにより，IBの要素を取り入れた探究的な授業を行う。 ・進路指導について具体的な方策や役割分担を決める。 ・図書館の目標が挑戦的な目標であることが分かったため，来年度に向けて適切な目標を検討する。
	生徒主体の探究活動の実践 （探究活動重点校） GP5・CP2	令和5年度は活動の自由度を高め、各教科の探究的な学び、キャリア教育とのつながりを教職員に求めたが、学校全体の生徒の自律的・自主的な学びにつなげる点で十分ではなかった。一部ではあるが積極的に活動にのぞんだ生徒は、地域の課題に対して提言したり、他校や他団体との協働を深めることができた。また、模擬国連や県主催のスタンフォード大学の授業参加等によって、国際的な視野を広げることができた。 【学校評価アンケート】 探究活動に意義を感じる　77%	・探究的な学びの実践・学びの個別最適化に向けて、生徒の学習習慣、キャリア形成意識が適切に変容している。 ・総合的な探究の時間に加え、各教科でも探究的な学びの導入が促進され、シラバス記載のPBLが実施されている。 ・校内にとどまらず、地域や企業と連携した探究的な学びが展開されている。 【学校評価アンケート】 探究活動に意義を感じる　90%以上	・生徒の意思決定力・しなやかさを身につける機会を提供し、学習習慣・キャリア形成意識の変容を促す。 ・探究学習において関係部署（教科：指導や助言・学年団：運営や進捗状況確認・分掌：外部連携など）との連携を強化し、支援する。 ・学習アプリなどICTの活用による、自習時間や非常時の学習活動の充実と学びの個別最適化をはかる。 ・シラバス記載のPBL実践と振返りによる修正機会を保障し、授業改善と生徒の学習習慣の変容を促す。 ・関係部署・地域・企業などと連携して学校行事を綿密に計画・立案し実施する。	・学びのスキルアンケート結果（肯定回答の変化：4月→11月）にについては、1年生（回答率88.9%）では、「コミュニケーションスキル（＋4.5）」「自己管理スキル（＋22.1%）」「リサーチスキル（＋27. 8）」「思考スキル（＋24.8）と全ての項目で数値が上昇した。2年生（回答率92.7%）では、「コミュニケーションスキル（-7.5）」「自己管理スキル（＋28.1）」「リサーチスキル（＋33. 8）」「思考スキル（＋27.4）」」という結果であった。 ・1年生は構造化型であったのですべてのスキルが上昇した。2年ではオープン型でテーマ設定ができない生徒が表現する機会が減り、「コミュニケーションスキル」数値の減少につながった。 ・学校評価アンケートの「探究活動に意義を感じる」は昨年度と同じ77%であった。	B	・プレ探究の取組みは生徒のATLスキルの上昇につながっている。しかし、IBコア科目を難しいイメージで捉えている生徒もおり、問いをわかりやすい表現にするなど工夫をする。 ・iFLATsとの連携が4月からスタートできることから、2年生でのテーマ設定を早期から決定する。 ・英数探究で数学への興味をもった生徒が数学オリンピックに出場するなど意欲の向上が見られた。また、国際探究チームがセントジョセフや安養高校（韓国）の生徒と交流しながら本校初の倉東模擬国連を開催できた。次年度も継続したい。 ・中部ハイスクールフォーラムに2件、鳥取県探究成果発表会に6件の成果発表を行うことができた。本選出場はならなかったが、高校生国際シンポジウムに9件のエントリーができた。REHSEでは2年ぶりに全国発表を行
	IB教育の理念を生かした授業改善と評価 （探究活動重点校） GP1・CP1	学習指導要領に対応した授業シラバスを作成し、探究活動先進校（立命館宇治）および進学先進校（灘中高等学校）の先生にアドバイスをもらい高評価を得た。しかし、シラバス通りに進められていない授業もあり、また、授業アンケート実施が不十分であるなど、全体として授業改善に取り組めていない。 【学校評価アンケート】 授業に満足している　81% ICTを活用した授業は学力を効果的に伸ばしている　　89%	・学習指導要領とIB系の教育課程を充実させ、教科横断的な学びを通して学力の向上を図る。 ・総合的な探究の時間・LHR・学校行事等の充実を図る。 ・生徒の能力や特性、置かれている状況を考慮して生徒が学び続けられる環境や機会を確保する。 【学校評価アンケート】 授業に満足している　90%以上 ICTを活用した授業は学力を効果的に伸ばしている　　90%以上	・学校運営委員会と連携して教育課程を検証し改善する。 ・IBワークショップや情報端末研修と連携して研究授業等を実施し、授業改善に努める。 ・共同運営部およびIB部と連携して学校行事を綿密に計画・立案し実施する。 ・自習時間は振替により減らし、非常時には配信授業等で対応することで授業時間を確保する。 ・シラバスの配信や学習アプリを有効活用するなどして各生徒に個別最適化された学びを促す。 ・授業アンケート等の内容を振り返り、適切な学習習慣が確立できるように努める。	・研究授業及び学びウィークを通して授業参観を促すことができた。 ・各分掌と連携し、学校行事やLHRや探究活動を計画・立案し実施している。 ・自習の振替や教科内で代行する対応を進めている。また、生徒に全科目のシラバス（評価規準あり）を配信した。各教科へ次年度のシラバスの作成にあたり、修正内容等を提示した。 ・授業アンケートでは前期から後期にかけて全ての項目で数値が向上した。学校評価アンケートの「授業に満足している」は83%、「ICTを活用した授業は学力を効果的に伸ばしている」は93%であった。	B	・本校にとって最適な教育課程を今後も検討していく。 ・PBLの実施率は100%であり、今後も教科内での探究的な学びを推進する。 ・研究授業のテーマを研修内容に沿ったものに設定する。 ・学習アプリを有効活用について各教科と検討し、生徒にその方法を提供する。 ・授業アンケート及び学校評価アンケートの結果を検討し、授業改善につなげるとともに、IB教育理念に関する質問項目についての検討も進めていく。
	学力向上による進路目標の実現 GP5・CP3	・東大会や医学会等での取り組みや進路学習を通して自らのキャリア形成について考える機会としている。 ・主体的な学習者の育成に向け、学年、教科、分掌で連携して取り組んでいるが、基礎学力の定着が不十分な生徒もおり、進路目標を下げざるを得ない生徒もいる。 ・大学合格者数が学校目標（東京大学を含む超難関大学合格者数5名以上、難関大学合格者数20名以上、中堅大学合格者数50名以上）に達しておらず、特に上位層の育成が十分とはいえない。	・様々な観点から自らのキャリア形成に適した進路目標を設定し、その実現に向け計画的、主体的に学習に取り組み、自己の進路目標を実現できる学力を身につけている。 ・高い目標を持ちながら学習活動に意欲的に取り組むことで進路実現を果たし、その結果大学合格者数が学校目標に到達している。 【学校評価アンケート】 倉吉東高の進路指導は充実している　90%以上	・講演会や進路学習等を更に充実させ、キャリア形成を考える機会とする。 ・学年、教科、分掌と連携し、面談や探究学習等を通して、生徒が主体的に学習に取り組む態度を育てる。 ・進路検討会や学年会を通して適切な進路目標を検討し、進路指導体制を充実させる。進路指導テストや校外模試等を利用して到達度を計り、進路実現に向けて学習活動の更なる充実を図る。	・進路学習や進路講演会、首都圏研修やアントレプレナー講演会等をとおして、生徒の主体性を育み、自らのキャリアについて深く考える機会を設けている。 ・定期的に担任面談を行い、学習状況を把握したり、進路目標について話し合う機会としている。 ・進路検討会や各学年会で進路情報を共有したり、進路指導テストや校外模試の結果を分析し、学習活動の振り返りや改善に役立てている。上位層の更なる育成や下位層への基礎学力の定着など学力向上への取組みが必要である。 ・学校評価アンケートの結果は生徒89%・保護者87%で	B	・今後も校内外で密に連携をとり取りながら様々な活動をとおして主体的に学ぶ態度の育成やキャリア形成について深く考える機会を設ける。また、様々な行事への積極的な参加を促す。 ・学年団と密に連携をとり計画的に進路学習や進路指導を行う。生徒の今後のキャリア形成や特色入試を視野に入れた指導を計画的に行う。 ・大学研究や大学入試に関する研究を積極的に行い、生徒個々に適切な進路目標を設定させるとともに、目標に向けた具体的な方策や適切な入試方法を検討する。
	国際交流の充実と語学力の向上 （グローバル人材育成重点校） GP3・CP4	・韓国、台湾、シンガポール、、フィリピンの各交流校とオンラインで意見交換を行った。また、10月の桃園高校来校では、生徒交流を行い、台湾の高校生に鳥取県中部の魅力を伝えることができるなど、英語力向上と、異文化理解の機会につなげることができた。 ・本校の実施する国際交流等の取組に生徒が積極的に参加するようになり、グローバル人材育成の事業が軌道に乗り始めた感がある一方で、参加する生徒に偏りがあることが課題である。 ・英語による発表に注力してきたが、交流を進める上では、「やり取り」や「ディベート」などの指導の充実が必要である。	・多様な文化を理解し、他者に対する敬意と思いやりをもち、主体的に行動できている。 ・グローカルリーダーとして、地域貢献・国際貢献につながる学びを行っている。 ・主体的な国際交流活動（海外研修旅行を除く）参加者数、のべ100名。 ・CEFR：B2（英検準1級）レベル5名以上・B1（英検2級）レベル80名以上→B1レベル以上の生徒総数400名	・模擬国連（ハーバード方式）を生徒主体で運営していき、議会運営能力や国際的感覚を高めていく。 ・海外交流校の来校や桃園高級中学訪問など、交流の場面で「おもてなしの心」を涵養し、異文化理解を深める。 ・英検の他、IELTS、TOEFL等の語学検定の受検を積極的に勧め、受検者数・合格者数の検証を行う。 ・英語の「やり取り」に関する教職員研修会を実施するとともに、授業における英語のやり取り等を適切に実施する。	・セントジョセフインスティテュート6名の生徒を本校に招き、また、安養高校4名とZOOMでつなぎ、総勢38名で本校主催の模擬国連を実施した。議論において、アカデミックな内容のリスニングとスピーキング、思考力での育成に課題がある。 ・倉東模擬国連の進行役の生徒4名は1月の模擬国連（東京）に参加した。本校での模擬国連の経験が活かされた。また、研修旅行では38名の生徒が桃園高校での交流をすることで、国際理解を深めることができた。他の交流も合わせて、のべ104名以上の参加者があった。 ・英検受検者は296名となり、昨年度よりも8名増加した。1月末時点で英検準1級合格者は8名、2級合格以上は87名だが、B1レベル以上400名には達していない。	B	・10月の台湾研修旅行でも本校生徒約40名が桃園高校に訪問し、また12月上旬には桃園高校の生徒40名程度が本校に来校し、相互交換をさらに促進していく。 ・来年度は引き続きセントジョセフか安養高校と対面で交流を深めていくことも計画中である。 ・8月のイングリッシュキャンプや4月のバーモント州との交流など希望者を募りながら生きた英語を使う機会を提供していく。 ・今後も英語の資格検定受検を積極的に促すとともに、来年度はAIを利用した英語教員研修を行い、生徒のコミュニケーション能力を伸ばしたい。B1レベル以上の生徒総数の目標については実態に合わせて検討したい。

学校の諸活動の推進・発信と中高連携の強化	自己肯定感の向上につながる学校行事・部活動の実践GP4	・部活動改廃規定によって今年度から募集停止・廃部の対象となる部活動が出たが、全校生徒のほとんどが何らかの部活動に所属して活動している（R6春で約82%）。 ・生徒会部主催の学校行事の企画運営にも多くの生徒が積極的に参画するなど、生徒と学校全体の関わりも増している。 「学校評価アンケート（生徒）」では、部活動に対して令和5年度は90%（R4:91%）で、肯定的な評価を得ている。 ・各種中国大会をはじめとして、全国高校総体、全国高総文祭など、運動部・文化部ともに成果を上げている。	・授業や学校行事と異なり、部活動が生徒の自己表現の場として、また、主体性や自律性を育む場となっている。 ・生徒会行事全般により生徒の関与の度合いを高め、生徒会活動や学校行事に対する「学校評価アンケート」での生徒の肯定的回答が90%を超えている。 【学校評価アンケート】 部活動は充実している　肯定的回答が90%以上	・部活動全般が活性化するよう、顧問や部の要望をヒアリングしながら部費やその他助成金が効果的に配分されるようにする。 ・行事実施にあたり、生徒会事務局と前もって準備を進めていくことを徹底する。あわせて外部施設や外部機関との連携を密にしていく。 ・自己の成長が感じられるよう、生徒会活動・学校行事・部活動ごとに、失敗を恐れず挑戦することの大切さを伝える。	・全国大会等に参加出場する部活動数、生徒数が微減気味である。いわゆる部費に加えて、助成費器具費の配分とあわせて活動を支えているところである。また、部室点検や部長会を通して、部活動における生徒の自主自律を促している。。「学校評価アンケート（生徒）」では、部活動に対して令和6年度は90%で、肯定的な評価を得ている。 ・前期、後期の生徒会事務局の生徒達と予め行事の確認と分担等を決めてから準備を進めるようにしている。メンバーは何らかの形で企画運営に関わっており、主体性や協働性を高める機会となっている。	B	・令和6年度末をもってアーチェリー男女、テニス男女、書道が廃部となる。現在該当する部活動に所属する生徒で、令和7年度以降も活動を希望していることもあり、現顧問並びに管理職と連携を密にして対応にあたりたい。　・生徒発信の生徒会行事や生徒の関与の高い生徒会行事の企画運営を目指して、対話を続けていく。
	育友会・同窓会・地域との連携	・育友会においてはコロナ渦前の取組が予定通りできるようになっている。総会も4年ぶりに集会形式での実施となり、参加者も多かった。役員の方々は大変積極的であるが、会員全体の盛り上がりに欠ける部分がある。 ・同窓会においては総会を開催し、5年ぶりに懇親会も実施することができた。各支部の取組も予定通り実施している。	・育友会においては、保護者と教職員が一体となって、生徒を学習面、生活面から支援することができている。総会において300名の参加人数を目標とする。 ・同窓会においては、会員相互の親善を図り、各自の向上発展に寄与し、母校との連携が密になっている。総会・懇親会での参加者を150名とする。	・役員との連携を十分にとりながら、活動を活性化させる。 ・国際バカロレア（IB）教育などの取組についての周知に努め、育友会及び同窓会会員の理解を深める。	・育友会総会を4年ぶりに集会形式で開催することができた。259名の参加があり、保護者の関心の高さを感じた。進路研修会などの参加も多く、各事業に活発な様子が戻ってきた。 ・同窓会においては4年ぶりに参加制限なしでのの総会を開催した。懇親会も行い、盛況な会となった。東京、東海、関西など、支部の総会も開催され、コロナ禍前の状況を取り戻している。 ・各事業において、保護者や同窓会で国際バカロレア教育の進捗状況が報告できている。	B	・育友会活動は、保護者が参加しやすいような体制を整え、教職員と一体となって生徒を支援する。育友会総会の参加者増に向けて工夫したい。 ・同窓会においては、総会の幹事学年運営を復活させ、規模を大きくしていく計画をしている。
	学校に関する情報の発信と中高連携の充実	・学校・育友会ホームページや倉東だより等広報誌によって本校の教育活動についてリアルタイムな情報発信ができており、記事数もかなり多い。SNS(インスタグラム)のフォロワーも増え続けている。 ・中学での高校説明会、体験入学では本校の紹介を工夫しながら丁寧に伝えることができている。	・本校ホームページがより魅力的なものとなり、情報発信力が向上している。SNSにおいてもリアルタイムな情報発信ができている。 ・HP閲覧数、SNSフォロワー数がさらに増える。年度末フォロワー数を2100名にする。 ・中学生に本校の特色や魅力が伝わり、志望する生徒が増える。中学生体験入学の参加数目標を320人とし、入試倍率を1．0以上にする。	・本校の教育活動に係るリアルタイムな情報発信に努める。 ・育友会広報委員会と連携し、保護者の本校教育活動への一層の理解と支援を促進する。 ・中学生体験入学や高校説明会の内容を充実させ、本校の取組を中学生に分かりやすく広報する。IBについての周知を図る。 ・新しい取組として、中学生とその保護者対象の授業公開を育友会総会日の午前に設ける。	・ホームページの記事発信（トップニュース）が多く、保護者、学校関係者へ好評である。SNSのフォロワーも増え続けており、12月時点で2300人を越えた。 ・育友会総会の午前に授業公開を行ったところ、参加者が大変に多く盛況であった。予想以上の参加人数になったため、運営面での見直しを行う。 ・中学生体験入学は昨年同様に暑熱対策を考えて教室での開催とした。参加者アンケートをみると好評である。特にチューターによる校内の案内・座談会について前向きな意見が多かった。	A	・情報発信がより重要であるという認識をもって今後も発信に努めていく。 ・中学2年生対象説明会で本校の魅力をさらに伝えていく。アドミッション・ポリシー等の広報にも努める。

【定時制課程】

年度当初					評価結果（3）月		
評価項目	具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
定時制教育のさらなる充実	全ての生徒への安心安全で居心地のよい環境の提供	・授業規律が守られるとともに、生徒の学習到達度に合わせた学習内容となるよう工夫し、ICTを活用する場面を取り入れ、生徒のやる気と集中を促している。 ・生徒会執行部が中心となって運営される各種行事が、学校生活を継続するための生徒の励みになっている。 ・毎日の打合せで生徒の情報を共有し、個々に合った統一感のある迅速で適切な指導につなげている。特性をもつ生徒に対する指導に関しては、まだ工夫の余地がある。	・規律ある学習態度が維持され、生徒は学習の意義や目的を理解し、意欲的に学んでいる。 ・生徒全員が安心安全な環境のもとでルールやマナーを守り、他者を尊重するとともに、授業や学校行事を通して自己の成長を感じられる雰囲気が保たれている。 ・教職員が生徒のことをよく理解し、丁寧で適切な指導がなされることで信頼関係が構築されている。	・授業のユニバーサルデザイン化と分かりやすい教材の工夫、Chromebookを活用した個別最適化された演習等を取り入れ、理解を促す指導を行う。 ・生徒が提案し、主体的に運営する生徒会活動となるよう工夫することで、生徒間の相互理解や連帯感のある集団となるよう努める。 ・生徒個々が抱える問題の解決に必要な支援や指導法について専門機関等と連携を強化するとともに、講師を招いての教職員研修を充実させ、個に応じた支援を行う。	・1学期は3年次生、2学期は2年次生が生徒会執行部の中心となって行事の企画・運営を行い、学年を超えた交友関係が構築され、登校意欲が高まる生徒が増えた。 ・毎日の打ち合わせで生徒情報を共有し、生徒理解を土台とした統一感のある生徒指導に加え、SC、SSW、CA、特別支援教育支援員や外部機関と連携しながら、個の状況に応じた指導を行い、不登校や怠学傾向のある生徒の改善につなげることができた。 ・全生徒を対象としたSC面談に加え、担任が中心となって定期的な面談や保護者との連絡を密にし、学校と家庭が一体となって生徒の困り感の解消に努めた。	A	・生徒会行事は、2年次生を中心とした新執行部体制で企画・運営しており、能動的な取り組みが見られるが、さらに多くの生徒が参加する協働的活動となるよう工夫する。 ・打ち合せでの生徒情報をもとに、SC、SSW、CA、特別支援教育支援員の協力も得ながら、全教職員による統一感のある個に対応したより丁寧な指導を行う。 ・不登校傾向の生徒や特性のある生徒に対して適切な対応ができるよう、外部機関との連携を強化するとともに、教育相談研修会などで、教職員による教育相談に関する学びを深め、生徒指導に活かす。
	生徒の人間的成長や進路目標達成のための教育活動のさらなる充実	・生徒は授業に真摯に取り組み、生徒会活動や学校行事を肯定的に捉え、進路実現を目指し、学校生活と就労の両立に努めているが、学び直し途上の生徒も多い。 ・生徒は率先して生徒会役員に立候補し、生徒会執行部員は先生方の協力を得ながら各種行事の企画・運営を行っている。 ・各種講演会や校外研修、職場見学・体験等を実施し、生徒の進路意識が高まるよう指導しているが、具体的な進路目標を立てる時期が遅い傾向にある。	・授業に対する生徒の理解度や満足度が高く、それが個々の生徒の学力の伸長につながり、一人一人の希望進路が実現されている。 ・生徒が自己と他者を大切にし、人間的に成長するために、学習活動に加え、生徒会活動や学校行事等に意欲的に取り組んでいる。 ・様々な教育活動や社会体験を通して、生徒が社会で必要とされる力を身につけている。	・学び直しを取り入れながら、生徒が学習内容を理解しているか把握しつつ授業を進めたり、個に応じた学習内容を提供したりすることで、生徒の学習意欲を促し、満足度の高い授業を行う。 ・生徒が主体的かつ意欲的に取り組むことができる生徒会活動とすることで、生徒の自尊感情を育む。 ・各種講演会や校外研修、職場見学・体験の内容を見直し、生徒自身が生き方・在り方を考え、自己実現に向けて具体的取り組みができるよう工夫する。	・「ICTを活用した生徒のやる気を促す授業」をテーマに全教員が公開授業を行うことに加え、AI搭載教材を授業に取り入れ、1人1台端末の活用場面を増やすことで、授業内容の定着と生徒の学習意欲の喚起につなげた。 ・県総体や県生連大会の会場準備及び競技への参加、生徒会行事の企画・運営に取り組ませることで、達成感や自己有用感が高まり、コミュニケーション能力の向上につながった。 ・各種講演会や校外研修を計画的に行い、生き方・在り方を考えさせるとともに、アルバイトを奨励し勤労観の醸成を図りながらキャリア教育の充実に努めた。	B	・Chromebook等のICTを活用した分かりやすい授業の実践や学校行事・生徒会活動等での機器の活用をさらに進めるととに、他校へも還元する。 ・各種行事や生徒会活動等で、生徒の能動的・協働的に活動する場面や内容を充実することで連帯感を高めるとともに、達成感や自己有用感、コミュニケーション能力の向上をより実感できるよう工夫する。 ・資格取得の奨励や課外の実施に加え、アルバイトや職場見学・体験を呼びかけ、キャリア形成に向かう動機付けとなるよう配慮する。

【全日・定時制課程共通】

年度当初					評価結果（3）月		
評価項目	具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
生徒支援の充実と業務改善の取組	環境の変化、ストレス等に対応した生徒への心身両面でのサポート	・様々な課題を抱えて心身のバランスを崩し、登校できない、登校しても教室へ入りづらい生徒が一定数見受けられる。 ・コロナ禍後の学校行事や教育活動の再開により、無理をしてしまう生徒や集団活動の経験の少なさに起因する疲労感・不安を抱えている生徒がいる。 ・学校評価アンケートにおいて「倉吉東高の先生方は信頼できる」が生徒88%、保護者90%、学校評価アンケート（保護者）では「倉吉東高は生徒や保護者の思いをくみ取って教育活動をしている。」が87%と肯定的な評価を受けている。	・生徒が抱えている課題や悩みについて、正確な把握ができ、生徒とともに解決策を考えることができている。 ・教職員が様々な場面で個々の生徒の情報を共有し、外部の機関等ともつながりながら、組織的な支援体制を構築できている。 【学校評価アンケート】「倉吉東高の先生方は信頼できる」「倉吉東高は生徒や保護者の思いをくみ取って教育活動をしている。」ともに90%以上	・生徒や保護者との面接、アンケート調査、hyper-QUなどの検討を通じて生徒の悩みやなりたい姿について理解を深める。 ・教員間の連絡を密にし、必要に応じて医療機関や福祉機関、行政機関と連携を取り、専門家の同席のもと支援会議を開くなどして、具体的な支援計画を策定し、実行と振り返り、改善を行っていく。	・アンケート調査やhyper-QUの結果を教職員間で共有し、生徒対応に活かすなど有効に活用できている。また、校内支援会議の開催や、必要に応じた外部機関との連携によって支援内容の充実を図ることができている。 ・集団生活に対して様々な課題を抱えている生徒に対しては、本人の思いを受け止めながら支援を継続し、落ち着いた生活を送っている者も多い。一方で相談することや支援を受けることに対して高いハードルを感じる生徒もいる。 ・学校評価アンケートでは「生徒や保護者の思いを汲み取って教育活動をしている」の保護者だけが87%となり、目標に達しなかった。	B	・今後も校内支援会議の開催や外部支援機関との連携を図り、支援の充実に努める。また定期的なアンケート、面談等を通して生徒の悩みを正確に把握するとともに教職員間で迅速に共有し、一貫した支援を行う。 ・心理教育や日頃の情報提供の機会を活用し、相談しやすい環境づくりを推進する。
	・業務内容の見直し ・長時間勤務者の解消	・令和5年度は、一人当たりの時間外業務は月平均30時間以内となったが、年間の合計が360時間を超える教職員が10名を超えている。 ・時間外の多い9月の業務カイゼンの一定の目途がついた。 ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが取れており、時間外業務は少ない。	・教職員の月当たりの時間外業務が月平均30時間を超える者が10名以下である。 ・休養日、活動時間を設定した部活動の活動方針が全部活動で徹底できている。 ・業務内容の精選について、各分掌及び学年で着手できている。	・時間外業務について、教職員が年間を通しての目標を意識する。また、部活動については、計画と実績報告との間に差異のないようにする。 ・校内業務の一層のDX化を図るとともに、改善された9月を含めて業務内容の点検を行っていく。 ・定時制については、引き続き行事と校内業務とのバランスをとっていく。	・夏休み明けテスト廃止など、業務を削減したことにより、9月の時間外業務は昨年度より減少したが、1月現在の月30時間を超える教職員が昨年度よりも5名増加した。 ・スクールポリシーから逆算した業務カイゼンの視点を取り入れ、削減できる業務を検討した。 ・部活動については、計画（30時間以内）と実績報告との間に差異のないよう声をかけている。 ・時間外業務の合計が月末にならないように、教職員自ら定期的に確認するようになってきた。 ・定時制では、学校行事や校務分掌のバランスが取れており、時間外業務は少ない。	B	・スクールポリシーもとにを行事を精選したが、その結果を検証するともに、業務カイゼンの視点を取り入れながら削減できる業務の検討を継続して行う。 ・時間外業務時間を各教職員が定期的に確認し、月30時間を超えない意識を高める。 ・AI採点システム使用やGoogle Formの利用を一層推進し、時間外業務削減につなげる。 ・定時制については、引き続き行事と校内業務とのバランスをとっていく。